

## 眞宗の発展と一向一揆

著者	笠原 一男
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政大學史學會々報
巻	5
ページ	9-10
発行年	1953-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00010438">http://doi.org/10.15002/00010438</a>

# 眞宗の発展と一向一揆

笠原 一男

前期封建社会における眞宗教団の発展過程を親鸞以後本願寺第十一世頭如にいたるまで辿つてみると、第三代本願寺法主覚如頃まで（鎌倉時代）は主として関東地区に発展のあとがみられる。もつとも発展したといつても、その数は室町時代後期に比して僅かなものであつた。しかも、それらは眞宗の正統派たる本願寺派よりも専修寺及びその他の諸派に多かつた。専修寺派などの諸派は同じ親鸞を祖とする眞宗の一派であるが、それらの教団が発展の社会的基盤とする階級は、地方土豪層、武士層が多かつたのである。中、小名主を主体とする封建的自営農層の多くはむしろ、本願寺派の教をうけ入れていたのである。眞宗をうけ入れる社会的基盤が封建的自営農層にあつたことが、関東、東北地区の如く、社会、経済的に遅れた段階にあり、武士、土豪の勢力が強大にして、農民の階層分化がおくれ、中、小名主の層の長がおくれた地区に本願寺派は中世を通じて華々しい発展を示めさなかつたのである。また、眞宗の布教形態の面から見ても、関東、東北に多く存在した下人層では本願寺の同朋、同行の寄合の組織の中に入つてゆくことが困難であつた。眞宗では村落内の坊主＝名主を中心

に講が開かれ、月に、一、二度信者＝門徒はその講に集り、お互いの信心を深めあい、幾何かの喜捨を坊主並びに本願寺に捧げるのであつた。講に集る農民は村落単位の農民ではなく、村、郷、荘、をこえた、広い地区にわたる農民であつた。このような自由は主人のもとに所有され、行動の自由と経済的余力を非常に制限されていた下人層には不可能であつた。

このように関東、東北地区が眞宗をうけ入れる社会的地盤たる封建的自営農＝中、小名主の成熟がおくれているのに比して、近畿、北陸、東海等の地区は、南北朝期から室町中期にかけて、大名主の分解は甚しく、中・小名主層の増加成長が目覚しく進んでいった。それは、荘園制の崩壊、鄉村制の形成と平行してすすんでいたのであり、農村は名主を中心として地縁的な結合と自治的な團結をもつようになつた。いわゆる、社会、経済的に進んだ地区ではこのように眞宗を受け入れる農民層の成長が急速に進んでいたのである。こうした眞宗を受け入れる社会的基盤たる封建的自営農の成長と正比例して、眞宗教団は、室町中期以後急速にその教線を伸べていたのである。それと共に関東、東北地区

に榮えた専修寺派も、教団の中心を越前から、更に、伊勢の高田一身田に移してゆくのである。とくに、時期的には真宗の發展は応仁の乱後の戦国時代を通じて、大巾に行われたのである。また、地域的には社会、経済的に進んだ近畿及び北陸、東海等に發展したのである。またこれらの地区でも真宗は平均した密度で發展したのではなく、北陸ならば海岸よりの平野地帯、東海地方の三河では矢作川の中流から海岸にかけて、尾張りでは木曾川のデルタ地帯、近畿では京都周辺、琵琶湖周辺（堅田）、その他摂津、河内等の平野地帯であつた。このように、真宗は、一地方でも、最も豊饒な地区に發展したのである。

こうした、真宗の發展が或る一定段階に達すると各地に必然的に一向一揆が勃発した。或いは荘園領に対し、或いは守護大名に対し、更に戦国大名に対して、またその大詰めとしては戦国の統一者信長に対しても。ではこうした真宗の發展と一向一揆の勃発の必然性ともいふべきものは如何なる要因に存したのであるうか。

それは、真宗の社会的基盤たる農民が、土一揆、徳政一揆のエネルギーである中・小名層であり、真宗の末寺道場の坊主は、それら村の門徒の上に道場経営の経済的基盤をおいていたため、常に門徒農民と同一行動をとらねばならなかつたことである。また、鄉村農民は唯でさえ、惣村的結合の力を以つて支配者層への反抗を繰り返していた時であり、その惣村的結合を更に大規模な真宗の教団組織で統一し、この恒常的な教団の組織の中に農民が組み入れられることによつて、団結の力をより強く自覚した。すなわち、従来のバラ／＼の農民は、真宗の門徒化することによつて、組織農民へと転化した。それと共に、封建的な在地武士群も、

荘園的領主のわずかに残つた権力をその土地から追放するために、これら一向一揆を利用して共に戦つたのである。しかし、門徒農民と武士の共同の敵たる古代的荘園領主を打倒した後には、封建支配者＝武士対門徒農民の斗争が開始された。特に、戦国大名の形成と農民支配の強化と封建的取奪の強化は、組織農民たる一向宗徒をしてこれら強力な戦国大名への反抗として立ち上らせた。一向一揆は、土一揆の戦えなかつた相手を相手として華々しく戦つたのである。こうした傾向は、彼ら戦国大名の統一者たる織田信長と門徒農民組織の頂点たる本願寺との全面的対決にまで進展した。その結果は本願寺の信長への条件付屈服となつて幕を閉じるのである。

### 執筆者紹介

板 沢 武 雄	本学教授
的 場 徳 造	講師
笠 原 一 男	講師
丸 山 忠 綱	教授
久 下 司	旧制一回卒
鈴 木 英 市	〃 二回卒
中 野 清 徳	新制三回卒